



## 故水野浩一教授を偲ぶ

——タイ調査の思い出——

本岡 武

私をはじめ水野浩一君を知ったのは、かれがフルブライト留学生としてコーネル大学に赴く前であったと思う。口羽益生君（現竜谷大学教授，東南アジア研究センター客員教授）がコーネル大学に留学されたあとを受けてであった。水野君の留学前にすでに臼井二尚教授をリーダーとして京都大学に東南アジア研究会が組織され，水野君は大学院生として矢野暢君（当時，法学部大学院生）とともに，この研究会の最も若い会員だった。私はこの研究会に参加したのが，1960年私のコーネル留学から帰ったときだった。だから水野君とはここ20年，このときくらい親しくさせてもらった。

東南アジア研究会がフォード財団から35万ドルのグラントをもらうまでは，いろいろと迂余曲折があった。フォード財団との交渉は，いわゆる臼井ミッションが1961年3～9月欧米，東南アジアの予備調査から帰国してはじまった。これは岩村忍先生を中心として進められたが，この交渉のころは水野君はコーネル大学へ留学していた。

1963年に京大東南アジア研究計画がたてられ，現地定着調査として，大陸部でタイ，半島島嶼部でマレーシアが，種々な検討のすえ選ばれた。最初は大陸部はピ

ルマ，半島島嶼部にインドネシアが想定されたが，いずれの国も政情不安のため，とても定着調査は残念ながら不可能であった。

マレーシア調査は文学部棚瀬襄爾助教授，タイ調査は当時農学部助教授だった私が担当することとなった。このときのタイの農村定着調査のスタッフは，文学部大学院生だった水野君のほか，当時農学部助手飯島茂君（現在，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）および矢野暢君（現京都大学東南アジア研究センター教授）の3人と，そのリーダーとしての私とからなりたっていた。

思えば17年昔のことになるが，私は1963年9月勇躍バンコクに赴き，最初はバンコクに調査の基地となるオフィスの設立に懸命になった。幸いにバンコクを中心の，しかも閑静な住宅地にオフィスを設けることができた。

つづいて飯島，水野，矢野の3君が到着した。われわれの計画では私がタイ農業問題の総括的研究を行い，3君がそれぞれ現地の村落に定着することにあつた。そして，3人の分担で，飯島君は北タイの山地民部落に，水野君は東北タイのコラートに近い農村に，そして矢野君は南タイのソククラに近い部落に入ることに

なった。その定着期間は最初は1年半、そしてそのあとフォローアップに2～3カ月入ることになった。

いまで考えれば、はじめての企画だけに、いろいろと思ひもかけないことに出会い、調査も障害を受けた。しかも期間がわずか1年あまりであった。これだけの調査をこの短い期間内にはたすことは、実に容易ならぬことであった。私はいまにしては、知らないものほど強いことではないと思う。

このきびしい自然条件のもと、しかも見ず知らずの現地人のもとに、3人ともよく溶けこんだのは、まったく驚嘆の至りである。私はリーダーであったものの、ひとつには自分の研究とオフィスの運営に忙殺されて、3人のお世話は全然できず、いまも申しわけなく思っているが、3人は実によく頑張られ、それぞれの方法で調査村落の人々によく溶けこまれた。実に立派だったと思う。そして、その調査の間、何の事故もなく過ごせたことは幸せだと思う。(あとで水野君が単独で調査にタイに渡ったとき大病にかかったのだが、これは私の調査のあとのことで誰かが書かれることと考えるので、省略したい。)

私もこの調査にもとづいて東南アジア農業開発論を東南アジア研究叢書として出版したが、矢野君はビルマ・タイの政治構造を叢書で出したあと、南タイの調査結果も近く出版される。飯島君はカレン族の研究を叢書で出し、水野君のタイ農村の社会組織も近く遺著として刊行される。水野君はコラートの農村調査をまずとりまとめ、これによって文学博士の学位を授与された。

いま思うと、かなり無暴な計画に着手したものだったが、それでも、このタイ

計画はうまく成功したものと信ずる。そして今日の東南アジア研究センターの隆盛な研究の基礎づけとなったと思う。

私は水野君と知りあって20年近くになるが、東北タイのコラート時代をいちばんなつかしく思い出す。私は村を訪れたことがあるが、まさにタイの「問題地域」といわれる東北タイの典型的な貧村であった。よくぞここで堪えぬいて生活したものだと思う。さすがのかれも、ときどきは、バンコクに息ぬきに出てきたことがあり、そのときは、いかにも愉しそうだった。

それにしても、かれが東南アジア研究を志して20年、まっしぐらに、フィールド・ワークを中心に仕事をつづけてきたのは、まったく感嘆に堪えない。

かれは本来寡黙である。自分の業績を喋々として語らない。だから、ちょっと接しただけでは、いったい何を考えているのか、何を思っているのか判らない。いわゆる自己宣伝とは全然反対のタイプである。それだけに、競争社会ではアンダーエスティメートをされがちな損な性格だったと思われる。しかし、実際仕事にたいしてひじょうに熱心なことはいうまでもなく、その寡黙なりにまたタイ人農村社会によくうちとけたと思われる。

その鍵は何であったか、私はかれの誠実にあったと思う。かれは実際お世辞とか、おべんちゃらとかは絶対にいわないタイプであった。とにかく真っ正直だった。これについて私はさすがに東洋考古学の大家水野清一先生のひとり息子だけはあるとよく思わされた。育ちのよさが身についていた。

だから、業績をあげるのにアクセクしなかった。しかし、かれだけのフィールド・ワークをしただけに、ひとりで、

つぎからつぎへと業績が生まれるのであった。遺著『タイ農村の社会組織』も近く創文社より京大東南アジア研究叢書の1冊として刊行されるが、その出版が待たれてならない。なぜなら、本書はタイ農村社会にかんする最も重要な文献のひとつになるであろうから。

水野君はまことに、おだやかな人であった。そして自分のペースを守り着々と業績をあげてゆかれた。私はかれは死ぬまで、このペースをくずさなかったが、ずっと長生きをしてもそうだったと思われる。それだけに、いまの時代では46才という若い年齢で世を去られたことは惜しみてあまりあるものがある。もしかれに年月が与えられるならば、かれは世界

有数の東南アジア専門の社会学者になったにちがいない。なぜなら、かれは実証的研究だけでなく、農村社会理論にもひじょうに興味をもっていたから。

私は、一時にせよ、かれをタイ計画のスタッフにもったことを誇りに思う。それだけにかれを失ったことは残念でたまらない。かれの仕事の上に、今後、東南アジア研究センターのタイ研究の業績が積みかさねられんことを祈るのみである。

なお、私は3人の遺児をかかえられた松子夫人が元気にこの世の荒波をきりひらかれてゆくことを切に祈ってやまない。（京都大学名誉教授、追手門学院大学経済学部長）